
俺だけはお前の味方

風斬速斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺だけはお前の味方

【Nコード】

N0068M

【作者名】

風斬速斗

【あらすじ】

飛び降りた女の子を助けて始まる青春学園ラブコメ！

『荒鷹事件』の犯人である若干不良の高校生御鷹雄飛。

雄飛にベタベタな暴力少女、クールで策士？の後輩に挟まれる雄

飛の運命はどうなるのか！

良い言い方をすれば歴史のある伝統的な、悪い言い方をすればポロポロで古臭い県立八清はっしん高校。

その校舎の中央階段を上りきると錆び付いた鉄の扉がある。

普段は行けないように鍵がかかっている鉄の扉。

いつもは力付くで開けるが、今日は鍵がかかっていない。

今までも開いていたことなどなかった。

授業中の筈なのに何故開いているのか。

「まさか先客がいるのか？」

そーっと扉から覗いてみる。

警戒しているのは先客ではなく、待伏せているかもしれない教師である。

誰もいない、何もない殺風景な屋上、教師は居なかったが代わりにフェンスの向こうに少女が立ち尽くしていた。

「おいおいまさか？」

嫌な予感がして女の子に駆け寄ると、嫌な予感は当たってしまった。女の子は飛び降り、そのあとを追うようにして飛び降りてしまう。五階建ての校舎、何とかしないとこれじゃあ二人とも助からない。

「手を！」

目を閉じてただただ泣いていた少女は目を見開いて、自分とともに落下している者の姿を見て驚いている。

そんなことは気にせず左手を伸ばして女の子の手を掴む。

「あ……っ」

「これに懲りたらなあ！二度とこんなことするんじゃないやねえ！」

空いている右手で拳を握り、全力で校舎の壁を殴る。

派手な音を立てて壁は崩れ、拳の形に穴が出来た。

拳が壁に突っ込んだままの状態なので何とか落下は防げた。

「あー、危なかった」

間一髪助かった。そう思ったかった。

しかし本当の恐怖はすぐそこまで迫っていた。

視線を少し下げた所にある窓が開き、メガネをかけた女性が笑顔を凍りつかせてこちらを見ている。

ひとまず女の子を教室に入れてあげて必死に弁解する。

「違うんですよ先生？ これには深い事情があつてですねー」

「御鷹雄飛君。生徒指導室に行きましようか？」

「はい……」

そして呆然とする女の子に見送られて先生に引きずられるのだった。

「授業中にわざわざ説教する必要はないと思われのですが？ 春

馬先生」

「校舎の壁壊しとして何を言いますか。それにもう放課後ですよ」

確かに引きずられている途中にチャイムは鳴った。

雄飛は引きずられる痛みで気づいてなかったが。

「それは飛び降りた女子生徒を救うために仕方のない犠牲だと思いません」

「あなたなら女子生徒の下敷きになつたとしても無事だったでしょう？」

「人の体を何だと思つてるんですか」

雄飛と対峙している教師の名前は春馬季子。

現代文の教師で雄飛の担任。

そして最も畏怖している人物。

「教師に対してその言い方はなんですか。テストの点数いじって留

年させますよ」

職権乱用、この言葉がこれほど合う状況が他にあるだろうか。

「すみませんでした」

「分かればいいんです」

大人しく頭を下げると一応許してもらえたようだ。

これで解放かと思っていると廊下から足音が聞こえる。

そして扉が勢いよく開くと茶色がかつたツインテールの少女が部屋に入ってくる。

「すみません春馬先生！ 雄飛バカがまたバカなことやっちゃってっ」

「雄飛君、保護者が迎えに来てくれたわよ」

「身長的には逆ですけどね」

少女は雄飛に近づいて後頭部を一発叩き、耳を引っ張る。

「痛い痛い痛い！」

「あんたはまたバカやって！ いい加減にしないと両足へし折るわよ！」

「分かったから手離して！ ちぎれる！」

「それじゃあ失礼します」

礼儀正しく一礼して部屋を出る。

耳を引っ張ったまま。

「落ち着けさくら。まずは手を離そうか」

よく小学生と見間違われる低身長。

光りに白く反射する健康的な八重歯。

大きな瞳の中には芯の強さが表れている。

黙っていればまるで妖精のような彼女はおしまいくび凰美桜。

「うるさい！ ちゃんと反省しなさいよ」

「何に對して？」

「さくらをバカにしたこと」

「バカにしたのはさくらじゃなくて身長をごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

言い終わる前に耳の引っ張りに捻りを加える。

いつの間にか怒りの内容が私的なことに変わっていることに子供っぽさを感じる。

実際背伸びしないと雄飛の耳には手が届かない。

「全くあんたは……」

周りには下校途中の生徒も居り、二人の姿を見て 正確には雄飛の姿を見て、目を合わせないようにしている。

「あんたまだ嫌われてるのね」

「勝手に周りがビビってるだけだ」

「そういうこと言うから誤解されるのよ」

溜息混じりに言葉を吐き捨てる桜。

雄飛と桜が中学二年生だったときある事件が起こった。

被害者は数十名に及び、その全員が瀕死の状態だった。

加害者はたった一人の少年。

三年たった今でも『荒鷹事件』と呼ばれ恐れられている。

「あ、はい、かばん」

思い出したように渡されるかばん。

「じゃあ帰るわよ」

桜に帰ることを促されるが何か釈然としない気持ちでいた。

何となく校舎を見上げると屋上にあの女の子の姿があった。

「さくらごめん、先帰っててくれ」

「え？ なんで？」

「ちよっと忘れ物」

名残惜しそうな桜に見送られ、駆け出す。

校舎の中に入り、階段を上り、息一つ切らさず屋上に辿り着く。

扉を壊すように開けると流石に女の子も驚いたように雄飛の方を

振り向く。

「あっ……」

怖がっているのか体を縮こませる。

改めて女の子を見てみると下ろしてある長い髪は夕日に照らされて綺麗に輝いている。

純白の柔肌は何故だか眩しくて。
瞳の奥には悲しみが宿っていた。

「二年の御鷹雄飛。知ってるみたいだけど」

「い、一年の朝陽女柘榴あさひめづるです。さっきはその、ええっと」

何かを言いかけているが、言おうとしていることがおかしいことに気づいているんだろう。

自ら飛び降りた人間が助けに来てくれてありがとうじゃあおかしな話だ。

雄飛は気になっていたことを率直に聞く。

「なんで飛び降りたりしたんだ？」

「そ、それはその……」

居心地悪そうに口を閉じていたがやがて意を決したように口を開く。

「何だか毎日の生活がつまらなくて生きてる意味が分からないんです。楽しくないっていうか」

「ふーん。ま、生きてる意味なんて俺だって分かんないけどね」

生きてる意味など深く考えたことはない。

雄飛は思ったことをそのまま口にした。

「たださ、他人に迷惑かけない程度に自分の好きに生きて、楽しければそれでいいんじゃない？」

「だから楽しくないんですよ」

「なら俺が君の人生を楽しくするから。楽しくないって感じたら俺のところに来なよ」

言うてから何だか告白みたいだと気づいて急に恥ずかしくなった。

柘榴は雄飛の顔をじっと見つめて衝撃の一言を放った。

「いえ、それは結構です」

「断るのかよ?!」

あまりに予想外の返答のためつい反射的につつこんでしまう。

恥ずかしい提案を全否定されてしまった。

柘榴はその姿を見て小さく笑う。

「ふふ、冗談ですよ。よろしく頼みますね、先輩」

見た者全てを虜にしまいそうな笑顔。

その笑顔には自分の人生を迷っているようには見えなかった。

何か言おうとすると扉から小さな台風が乱入して来る。

「何やっとなんじゃあー！」

「ごふあっ?!」

突入するや否や飛び蹴りを見舞ってきた少女は吹き飛ばされた雄飛を更に踏みつける。

その表情は完璧に怒っていた。

「あんた何してんの？ 忘れ物ってこの子を口説くことだったの？」

「違う！ 口説くつもりなんてありませんから足どけて！」

「そんな先輩、いつでも俺のところへ来いって言ったのは嘘だったんですか？」

柘榴の言葉を聞いて足に力が入る。

見下ろす視線も冷た過ぎる。

人体からしてはいけない音が聞こえるのは気のせいだろう。

「言ったけど！ そういう意味じゃないし、今このタイミングで言う必要性ある?!」

「皆無ですね」

「分かってるなら言うなー！」

「やかましい！」

「うがはっ?!」

雄飛の危険な日々はまだ始まったばかりである。

(後書き)

時間かかりましたが短編書いてました。

字数気にせず書くのは楽でいいですねww

色々書きたい話もあるのでこれから短編書くかも。

感想頂けば連載も考えますので感想よろしくお願いします！
もちろん「瞳で繋がる六道輪廻」も頑張ります！o(> <)o

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0068m/>

俺だけはお前の味方

2010年10月8日14時40分発行